

哲學の誕生

——「哲學入門」のための序章——

藤井義夫

ヨーロッパ哲學の發端は、人も知る如く、紀元前六世紀の中葉、小アジアの西岸にあるギリシヤの一殖民都市、ミレトスに生れた哲學者——七賢人の一人——タレスにまで遡る。それ以後凡そ三世紀の間にギリシヤ人は哲學のみならず數學、天文學、自然學、歴史學、地理學、醫學など凡ゆる學問の領域においてそれぞれの體系を完成し、その黃金時代を築き上げた。そしてとくに「ギリシヤ人の哲學」は現代に至るまでの殆ど凡ての哲學思想をきびしく支配し、ひとは思想的な危機に逢着するたびに哲學のこの故郷に想ひを馳せ、「ギリシヤに還れ」と叫ぶことをつねとしてゐる。このことは如何にして可能であつたであらうか。

1
一 序説 我々は古代ギリシヤに何を負つてゐるか いはゆる「ギリシヤの奇蹟」は如何にして生じたであらうか。ギリシヤ人の智慧は我々にとつて何を意味すべきであらうか。そもそも我々は古典古代に何を負つてゐるのであ

るか。古來多くの人々の關心を牽き寄せたこれらの問ひに對しては、すでに歴史家、文獻學者、哲學者などによつてそれぞれの領域から各様の解明が與へられた。その最も手近な一例としてブチャーをとらう。この卓れたイギリスの古典學者はこの國の讀書界にも夙に紹介せられ熟知されてゐる美事な論文集「ギリシヤ天才の諸相」(S. H. Butcher: *Some Aspects of the Greek Genius*, 3 ed. 1904) の中でそれを大略次のやうな言葉で語つてゐる。

「ギリシヤ人は古代の他のどの民族にもまして知識をそれ自身のために愛した。事物をありのままに見ること、それらの意味を識別し、その諸關係を調整すること、これらのが彼らにとつては本能であり情熱であつた。科學や哲學に用ひた彼らの方法は甚だ誤謬の多いものであり、そして彼らの結論もしばしば不條理であつたかも知れないが、しかし彼らは眞實にもものを見ることの第一條件であるあの畏れを知らぬ知性をもつてゐた。……彼らは自然に問ひかけ、そして狐疑も躊躇もしないで、自然からその祕密を奪取しようとした。一度眞理への情熱にとりつかれるや、ギリシヤ人は勇敢にも理性に信を置き、結果を顧慮しないで理性の導きに従つた。……ギリシヤが初めて世界史の主流に現はれるとき、我々は生々と躍動する人間的感覺と知性および想像力の自由な活動とを見出す。それを以て自然とその不可解な力とが人間の上に覆ひかぶさつてゐたところのかの壓倒的な沈黙は破られた。といつてもギリシヤ人の氣質が不敬虔であるとか、宇宙から神祕を剝ぎとるとかいふのではない。神祕は依然としてそこにあり、また感ぜられてゐる、そしてギリシヤの明るい英雄的な記録の中に、そこはかとなく聞える多くの哀調を残してきた。しかしその神祕感もまだ神祕主義とはなつてゐない。……『汝自らを知れ』とはギリシヤ人がスプリングスの謎に應へた答である。しかしギリシヤ人にとつて『汝自らを知れ』といふことはたゞに人間を知ることのみならず、また異邦

人を知ることを意味した。そしてこの研究に彼らを赴かせたものは單にフェニキア人を動かしてゐたやうな商業的なまた射利的な本能のみでなく、またそれが主となつてゐるのでさへもなく、たゞ知らうとするひたむきな願望であつた。それは世界において新しいことであつた。……プラトンとアリストテレスにおいて絶頂に達した思索力は時代と環境とに對して適當な酌量をすれば、イオニアの哲學者においても殆ど同様に著しかつた。そしてこのイオニアこそは東洋に知られなかつたところの、しかし近代科學の出發點となつたところの一つの觀念を生んだのである——自然は一定の法則によつて働くといふあの觀念を。エウリピデスの斷片はそれについて言つてゐる、『根源を探究することを知りえたものは幸ひなるかな、自然の不死にして不老なる秩序を、それが何處より、如何にして、何故に生じたかを省察しえた者は幸ひなるかな』と。イオニアの初期の詩人哲學者たちは、經驗的知識を學問的知識から分つたところの一線を超えて人知を押し進めてきた衝動を與へた人たちであつた。そしてこの方面におけるギリシヤ人の精神的早熟は、東洋人のそれとは異つて、將來の不斷の進歩の希望をその中に藏してゐた——數學や幾何學や實驗物理學や、また醫學や生理學における偉大なる發見の希望を。」

かくてブッチャーは以上を結論して言ふ。「我々は科學を愛すること、藝術を愛すること、自由を愛することをギリシヤに負つてゐる。ただしそれは科學だけでなく、藝術だけではなく、或は自由だけでもなく、これらは相互に生命の底から關聯し、有機的に結合したものである。さうしてこの結合の中に我々は西洋の特殊相を認識する。ギリシヤ精神はヨーロッパ精神が最初に、最も美しく花を開いたものである。ギリシヤ精神とのいきいきした接觸によつてヨーロッパはあの進歩と呼ばれる新しくして力強い推進力を得た。」

我々は上にかなり長い引用を取へてしたが、ヨーロッパ文化の基調となつてゐるギリシヤ精神の一般的性格をこれ程印象的にそして適確に表現したものは稀であらう。古代にその繁榮を誇つたエジプト、アッシリア、バビュロニア、フェニキアなどの國々においてではなく、とくにギリシヤにおいて學問が、そしてとくに哲學が誕生し、古代哲學が直ちにギリシヤ哲學と同義語に解される所以がまさしくここに存在する。

二 實利的精神と愛知的精神

地中海文明の先達であり、古代世界における最古の海上國民として、航海と探險とに不屈不撓の魂を傾け、そして最も有能な貿易業者であつたフェニキア人は、古代史が傳へる如く、ギリシヤ多島海を足場として全エーゲ世界から遠く大西洋岸まで世界貿易の販路を擴げ、莫大なる富を蓄積した。彼らはアジア、ヨーロッパおよびアフリカの三大陸における主産物の交易の仲介者であり、また自らも製陶、硝子の製法の創始者であり、染色術その他の秀れた工藝技術によつてその名をなした古代文明の有力な一員であつた。けれども彼らには物質文明の外的活動が總てであつて、精神文化の内的育成はおよそ縁遠きものであつた。彼らにとつて富は人生の目的そのものであつて、決して目的への手段ではなかつた。プラトンが「國家」(第四卷、四三五E)および「法律」(第五卷、七四七C)において述べてゐるやうに、トラキア人やスキタイ人が氣概ある (*θυμοειδής*) 國民であり、ギリシヤ人が知識を愛する (*φιλομαθής*) 國民であるに對して、フェニキア人はエジプト人と同じく財貨を愛する (*φιλοκελευτής*) ことをその民族的な特長とした。彼らはギリシヤ人に精神生活の進歩と抽象的思惟の發展にとつて決定的な重要さをもつところのアルファベットを傳播し、書く術を教へたけれども、自らは書くことをしなかつた。彼らに

とつて文字は商業上の用を辨ずれば充分であり、自己の歴史を省察してそれを後世に傳へる利器でも、文學を創造し民族を陶冶する道具でもなかつた。彼らの藝術なるものもたかだか他の民族の藝術の單なる模倣であるにしか過ぎなかつた。かゝる生活態度が彼らに——カルタゴの如き大殖民都市をもつたにも拘らず——強い國家的統一の意識を齎さなかつたのは當然であらう。

ギリシャ人もその自然的環境からして、生れながらの海國人であり、大海を自己の公道とみなし、商業と蓄財に執着する慧敏な貿易業者である點においてフェニキア人に譲るものではなかつた。彼らはフェニキア人から造船術、航海術、工業的諸技術などを學び、次第に彼らの先達に拮抗しうるに至つた。しかしギリシャ人にとつて富は決して人生の目的そのものではなく、單に目的への手段にしか過ぎなかつた。彼らの知識への愛求はつねに實利的な欲求を凌駕して、彼らを理想主義者たらしめた。彼らにとつては單に生きることがではなく、よく生きることが關心の中核をなすものであつた。そして彼らの高い倫理意識はこのよく生きることの基礎を國家（ポリス）に求めしめた。國家（ポリス）は單に富をうるための機關ではなく、凡ゆる人格的價値の實現と倫理的理想の完成を目的とする有機體なのだからである。

5

三 愛知的精神は閑暇から生れる ところでこのやうにギリシャ人をフェニキア人から峻別し、前者をヨーロッパ文化の父たらしめた愛知的精神はどのやうにして形成せられたのであらうか。「人はパンのみにて生きるものにあらず」といふことを、かのイスラエルの民とは異つて、人間的な獨自の仕方では自覺してゐたギリシャ人は知識愛の在り

方をどのやうに理解してゐたのであらうか。アリストテレスは「形而上學」の開卷辟頭において、感覺から表象、經驗、技術などを経て智慧に至る知識の系譜を興味深く述べた後に、我々の問題について次のやうに述べてゐる。

「ところで初めて常識を超えて何らかの技術を發明した人は、その發明されたもの或るものが有用であるといふ理由からだけでなく、彼は智者であり他に卓れた者であるとして人々から驚嘆されたのは當然のことである。ところで多くの技術が發明せられ、その或るものは必需用であり、他のものは娯樂用であるとすれば、後者の發明者は彼らの知識が必要のためのものでないといふ理由でつねに前者の發明者よりも智慧あるものとみなされたのも當然のことである。さういふわけでこのやうな凡てのものがすでに完備せられてから、しかも人々が閑暇をもつた土地において、初めて快樂のためでも必需のためでもない學問が發見せられたのである。エジプトあたりで數學的技術が初めて出來上つた所以である、といふのはかの地では僧侶階級が閑暇をもつことを許されてゐたからである（第一卷、第一章、九八一—三二五。）

或る目的に役立つものは、それが技術であれ知識であれ、目的に役立つ限りにおいて價值あるものであるに違ひない。しかしそれが自己の外に或る目的をもつ限りにおいて、それ自身は價值なきものとも言ひうる。最高の價值あるもの、究竟的に善なるものは他に奉仕するのではなく、自己目的々であり、自己原因的なものでなくてはならぬ。哲學が「無用の學」と言はれるのもかゝる意味においてである。それは他の凡てを基礎づけるものであつて、他によつて基礎づけられるものでない。アリストテレス的に言へば、棟梁的 (*ἀποκτερονική*) であつても職人的 (*ἑσπότης*) であつてはならない。知識への愛がかゝる「無用の學」に究極するものであることは明白であらう。これ

7
みが永遠なるものを具有しうるからである。

ところでこのことは「有用の學」すなはち道具としての學問が一應整備せられ、人々が世俗的な營爲に煩はされることなく、閑暇をそして自由な精神活動をもつときのみ可能である。純粹なる知識への愛は閑暇を母胎として生れる。閑暇は哲學を成熟せしめその誕生を約束する。のみならずギリシヤ人にとつて閑暇をもつことは、自由人たることの資格でありまた特權でもあつた。しかしこのことを誤りなく把握するためには、閑暇を意味する *σχολή* といふギリシヤ語を含む三つの意味を區別することが必要である。この言葉は第一に、「仕事^{ひま}が閑暇になつた」などといふ表現によつて示される如く、最も日常的には活動の休止 (*ἀναπαύσις*) ないし活動の弛緩 (*ἀραιός*) を意味する。そして勞働から解放され憩ひの時をもつことはまた自由にスポーツやダンスに打ち興じ、戀人と語り合ふことでもあるからして、閑暇は第二に慰戲 (*παίζω*) を意味する。閑暇人がときとして道樂者に通じ、また「小人閑居して不善をなす」などの俚諺はこの義に近いものを含むと言ひうるでもあらうか。しかしそれは第三に——そして恐らくギリシヤ人に独自の用法であるが——自由な、そして自發的な活動の根源を意味する。閑暇はこゝでは活動の終止ではなくして却つてその始源であり、閑暇をもつことは怠惰を意味するのではなくして、むしろその反對である。それが知識への愛のみでなく、自由への愛および藝術への愛を可能にするところの必須の條件となる、とさきに言はれたのはこの意味においてである。アリストテレスが「ニコマコス倫理學」において「幸福は閑暇のうちにあると思はれる、なぜなら我々は閑暇をもつために離齷し、また平和になるために戰爭をする」(第十卷、第七章、一一七b四—六)と述べ、政治や軍事に關することがらは或る目的をを目指すものであるから非閑暇的であるけれども、理性の活動は觀想的であり

それ自身以外いかなる目的も希求しないから自足的でありまた閑暇的であつて、かゝる理性に即して生きることを神的生活であると語つたのは、閑暇の哲學的なそとしてとくにギリシヤの意味においてなのである。従つて哲學者は何もしてゐないとき最も活動的である、といふことは決して奇を好む逆説ではない。プラトンが「饗宴」(一七三C)においてアポドロソスをして語らしめてゐるやうに、財産家や金儲けをこととする人たちは「何もしてゐないのに何かかどのあることをしてゐると思ひ込んでゐる」に過ぎないのである。従つて σχολα (scholē) が後に schola となり school となつたことは決して偶然ではないであらう。school は單に富裕な閑人の遊學する場所であるのではなく、また自己の多識を誇示するための閑文字を弄するところでもない、それは σχολα のより深い意味に従つて、精神的に自由な人々がより高き人間性を自覺し完成するための基盤を育成する場所なのだからである。

四 愛知的精神は驚異から生れる

しかし閑暇をもつことから直ちに哲學が生れるのではないことは言ふまでもない。エヂプトの僧侶階級によつて數學的技術が創始されたにしても、それが純粹な學問的體系にまで高められるには、直ちに明かにされるであらうやうに、なほギリシヤの天才たちを俟つことが必要であつた。閑暇が哲學の誕生の外的條件であるとするならば、その内的條件は驚異に外ならぬ。アリストテレスは「形而上學」の上に引用された場所に續いて、第一原理と第一原因とを考察する學としての哲學 (σοφία) について次のやうに書いてゐる。

「哲學が制作的學でないことは最初哲學した人々からしても明かである。といふのは現在でもまた當初にあつても人々が哲學し初めたのは驚異によつてなのだからである、最初は手近にある奇異なるものに驚き、それから徐々に進

歩いてより大なるもの、たとへば月の盈虧とか太陽や星辰についての様態とかまた萬物の生成について疑問をもつたのである。ところで疑問をもち驚異する人々は自分を無知だと考へる。神話を愛する人 (Gaiologos) が或る意味で智慧を愛する人 (Gaiosophos) である所以である、なぜなら神話は驚異から造り上げられるのだからである。かくて人々が哲學したのは無知を逃れるためであつてみれば、彼らは知るために知識を追求したのであつて、功利的に或る目的のためにさうしたのでないことは明かである。それは事實そのものが證明する。といふのは必要なものや安樂や娛樂のためのものが殆ど凡て具備せられてから、かゝる知見 (Spontans) が探究され始めたのだからである。かくて我々がかゝる知見を他の利用のために求めてゐるのでないことは明かである、むしろ己自身のためにあつて、他の人のためにあるのではない人々を我々が自由人と呼ぶ如く、諸學のうちこの學のみが自由なる學である、けだしこれのみが己自らのためにあるのだからである」(第一卷、第二章、九八二b—二八)。

人口に膾炙したこの一節は哲學の誕生の經過をきはめて簡明に表白してゐる。哲學が驚きから生れるといふことは殆ど論議の餘地がないであらう。ひとが閑暇にあつて虚心に自己の周邊を眺めわたすとき、萬象これ驚異の對象たらざるはない。輝くあの星空を見よ。自然界の均齊を想へ。いな、野邊に咲く一輪の百合にすら、ひとは驚異の眼を睜らざるをえないであらう。そして眞に驚異しそして懷疑する人は自己を無知とし、その無知を超えようとする人である。なぜなら無知の自覺は必然的に知ることへの愛と努力とを伴ふ。單なる詠歎主義や徒らなる虛無主義は哲學を生むものとはならないからである。哲學が凡ゆることがらについての知者であることを誇示して憚らなかつたソブイストたちの博學と自負とからではなく、自分は何も知らないといふことだけを知つてゐると謙虛に自白して悔ひなかつ

たソクラテスのいはゆる「無知の知」の自覺から生れた理由がこゝにある。近世哲學の偉大な二人の先驅者、すなはち凡ての偶像 (Idola) を破壊し、自己の純粹經驗から歸納されるものみに眞理の名を許さうとしたフランシス・ベーコンも、また凡てを疑ひ、疑ひの底にある自我の存在の自證性——*Cogito, ergo sum*——に哲學の出發を求めようとしたデカルトも、それが經驗主義であると合理主義であるとを問はず、眞の哲學がかゝる驚異と懷疑に徹することからのみ生れうることについての好個の證人である。

五 バビュロニア天文學の占星術的性格 ギリシヤ人が學問、藝術、政治など凡ゆる人間的なる創造についての偉大な天才であつたことはすでに言はれた。しかしこのことは彼らがこれら凡てを自分の手で創造しそして完成させたことを意味するのではない。彼らがエヂプトから、バビュロニアから、その他東方の文化諸民族から多くの技術的知識と經驗とを學んだことは疑ひもない事實なのだからである。我々はむしろバビュロニアをギリシヤ天才を生んだ父であり、エヂプトをその母であるとすら呼びうるであらう。このことを明かにするために我々は人間的精神の諸々の營爲のうち、とくに科學の名に相應しい探究の最初の試針が投ぜられた天文學と數學とについて考察してみよう。

ミレトスのタレスは、周知のやうに、ハリュソス河畔におけるリュディア人とメディア人との戰を終止せしめた日蝕——それは今日一般に承認せられてゐる推定によれば、紀元前五八五年三月二十八日であつた——を豫言して郷土の人々を驚かせ、彼の神的な智慧を景仰せしめたが (ヘロドトス、「歴史」第一卷、第七四節)、それはバビュロニアにおける天體の觀測と日蝕の週期の研究なしには不可能であつたであらう。といふのはカルデア人は數世紀にわたる觀測

記録の結果、日蝕が六五八五日（すなはち十八年餘）の週期をもつて規則正しく運つてくることをすでに知つてゐたからである。彼らによつてサロスと呼ばれたこの週期をタレスも知悉してゐたに違ひない、しかも彼は六〇三年三月十八日に起つた大日蝕をエヂプトにおいて観測しえたであらうから、彼が十八年後の五八五年三月十八日以降に日蝕が起ることを豫言しえたのは少しも不思議ではないからである。バビュロニアの天文學に關する我々の知識は、十九世紀に至るまではギリシヤ人からの傳承によるもの以外には殆ど存在しなかつたが、一八四八年イギリスの古代學者レイアードによつてアッシリヤ王サルダナパロス（前八世紀）のニネヴェ王宮圖書館が発見され（A. H. Layard: *Niniveh and its remains* 1848）、爾後バビュロニア學者たちの異常な努力によつて、そこから出土した楔形文字による天文學上の記録が解讀されるに及んで、その驚くべき進歩の狀況が明かにされた。我々はその詳細をこゝに記述するではないが、それを推知するためにはカルデア人が一年を近似的に三六五日と定め、時間を測定するために水時計を用ひ、水星、金星、火星、木星、土星などの諸遊星を認め、さらにそれらの運動の観測を行つたことを誌して置けば充分であらう。我々にとつて重要なのは、規則的なそして弛まざる天體觀測の集積としてのバビュロニアのかゝる高度の天文學的知識にもかゝらず、それが主として占星術的な興味によつて導かれ、決して學問的關心に支配されたものではなかつたといふ事實である。このことは天文學がもつばら僧侶階級の占有するところとなつてゐたことによつても促進されたであらう。ローマの歴史家ディオドロスの次の證言はこのことを物語つて餘蘊がない。

「カルデア人たちは大昔から星辰の觀測を行ひ、そして何人にもまして精密に個々の星の運動と力とを研究したからして、彼らは未來の多くの出來事を世人に豫言しうるのである。彼らの言ふところによれば、最も重要なのは遊星

と呼ばれる五つの星の力についての研究である。それらを彼らは共通に『告知者』(equinoctials)と名づけてゐる、しかし個々のものについては、ギリシヤ人によつてクロノスと名づけられてゐる星を最も顯著なものであり、最も多くのしかも最も重要なことがらを預言するものとして、ヘリオス(のこ)と呼んでゐる。がしかし他の四つを、彼らは我が國の天文學者と同様に、アレス(Mars)、アプロディテ(Venus)、ヘルメス(Mercurius)、ゼウス(Jupiter)と呼んでゐる。彼らがこれらの星を告知者と呼んでゐる理由は、他の星が定位して正常の軌道を一筋に周行してゐるのに、これらのみがそれぞれ独自の軌道を進み、それによつて未來の出來事を豫示し、世人に神々の意向を告知するからである。といふのはそれらを注意深く觀察しようとするものには、あるひは星の出により、あるひは星の入りにより、またときにはその色によつて前兆を豫知しうる、と彼らは言つてゐるからである。けだしそれらが知らせるのは或るときは烈しい暴風であり、或るときは稀有の豪雨や旱魃であり、またときとしては慧星の出現であり、日蝕や地震であり、そして一般に諸民族や諸地域にのみならずまた諸王や到るところの庶民にまで利益や災害をもたらすところの空中に起る凡ゆる異變である。彼らの言ふところによれば、これらの遊星の軌道の下には『助言する神々』と呼ばれる三十の星が位置してゐる。これらの星の半ばは地上遙かの領域を見張り、他の半ばは地下の領域にあつて見張つてゐる。かうして人間界の出來事や天上界の出來事を同時に見透すのである」(「歴史文庫」第二卷、第三十章)。

六 ギリシヤ天文學とピュタゴラス學派の世界像 カルデア人のかゝる天體觀測による全く經驗的な天文學的知識を資料として、これを精密な天體の理論にまで昂め、民俗的な占星術を排して、これを學としての天文學にまで體系

づけたのはギリシャの天才たちの功績である。タレスの日蝕の豫言が日蝕の原因に關する學理的知識を基礎として計算されたものでなく、主としてバビロニアの天體觀測に負ふものであることはすでに述べた。ところでこのミレトスの賢者が異邦の新知識をヘラスに舶來し普及した斯學の單なる紹介者に過ぎなかつたか、それとも彼自身東方のかかる經驗的知識を純理的學問にまで進化せしめえたかどうかは、現在我々に傳へられてゐるきはめて乏しい報告からは遽かに決定し難い。けれども彼の死後一世紀を経ずしてギリシャにおいては地球が球體であり、何ものにも運載されてゐないことが發見され、また蝕現象および月の盈虚の眞の原因、太陽による月の照明などの事象が解明され、さらに地球が天體の中心をなすものでなく、他の遊星と同じくその中心を轉回するものであり、その中心は太陽であるといふ太陽中心の宇宙觀が構想されるに至つた。後の天文學的發展に對して決定的な重要さをもつところのこれらの事象の發見と原因の究明は、タレスを宗とするヘラスの初期思想家たちの天文學的研究の志向が單なる經驗的事實の聚積に甘んじたものではなく、それを超えてその根源を追求し、眞理の把握を念願したであらうことを推知せしむるものがあるであらう。

我々はこのことをもつと具體的に説明するために、たとへばピュタゴラス學派によつて構想された異色のある世界像をとつてみよう。彼らははじめて地球が球狀をなすことを主張し、そして一般に天體もまた球狀をなし、諸々の星辰はその表面に附著してゐるものと考へた。しかし月と太陽と遊星とが星座を通過し、また遊星が時々月に遮られることに氣づいたとき、人々は地球からの諸天體の距離が種々相違してゐることを認識せざるをえなかつた。天體の運動とその相互の位置を地球との關係において説明しようとする試みは、ギリシャ人のうち最初にピュタゴラス學派に

よつて行はれたが、その代表的なものは五世紀のピロラオスであつた。そして太陽中心的世界観はいはゆる「數の形而上學」と「天體の調和論」とを基礎として最初の巨歩を踏み出したと言ふことができるであらう。

ピロラオスによれば、地球はもはやコスモスの中心ではなく、その位置は中心火によつて占められ、それをめぐつて十の天體が運動してゐる。それに最も近いのは對地球 (antipoda) であり、これに地球、月、太陽、五つの遊星および恒星がこの順序で續いてゐる。けれども我々は中心火も對地球も見ることとはできない。といふのはあたかもつねに地球に同一の面をむけてゐる月の背面から我々は決して地球を見えないであらう如く、中心火や對地球は我々の住む地球の面とつねに反對の側に位置してゐるからである。天體の日週運動も反對の方向への地球の運動によつて説明される。この運動はもちろん地球の自轉ではなく中心火をめぐる軌道運動である。ところでピロラオスの對地球なる一見不可解な假定は何を意味するのであらうか。アリストテレスはそれを次のやうに解釋してゐる。

「かくて他のものがその凡ゆる本性上數を模倣してゐるやうに思はれ、數は自然全體のうちで最初のものと思はれたからして、彼ら(ピュタゴラス學派)は數の諸要素を存在する凡てのもの諸要素であり、また全天體は調和であり數であると考へた。そして彼らは數や調和において天體の諸様態や諸部分やまた凡ゆる宇宙的秩序に合致しようとするものを集めて(自説に)適用した。そしてもし何處かに缺けたものがあつたならば、彼らの全學説を首尾一貫させるやうに、それを補充することに努めた。その意味はたとへばかうである、十なる數は完全なものであり、また數の凡ゆる本性を包含するものと考へられるからして、運行する天體も十であると彼らは主張する、ところが可視的な天體は九つにしか過ぎないから、彼らはそのために十番目のものとして對地球を作るのである」(「形而上學」第一卷、

また「天體論」においてもアリストテレスは對地球に關して「ピュタゴラス學派は現象を説明するために理據（ロゴス）や原因を探究するのではなくて、むしろ或る理據（ロゴス）や自説のために現象を牽強し、そしてそれに適合させようと試みてゐる」（第二卷、第十三章、二九三a二五—二八）と批評してゐる。しかしこの非難にもかゝらず、對地球とは要するに地中海世界の反對側にある半球であり、それは地球とともに二十四時間をもつて中心火の周圍を運行するものであるから、地球と對地球とを一體として把握すれば、今日の地球の觀念を得るであらう。また中心火もピュタゴラス學派の好みによつて「萬象の爐」（*ἑστία τοῦ παντός*）、「ゼウスの家」（*Ἴλιος οἶκος*）「神々の母」（*μητέρα θεῶν*）などの神話的な名前で呼ばれたけれども（Diels-Kranz: *Fragmente der Vorsokratiker* I (44) *Philolaos* A 16）、このことはロゴスとヒュポテシスとによつて現象を救はうとする彼らの科學的態度を否定するものではない。中心火を太陽に置きかへるならば、地球が他の遊星と同じくその周圍を運行する球體であることによつて、我々はこゝに明かにコペルニクスの地動説の先驅を見出しうるからである。事實ポントスのヘラクレイデスがすでに紀元前四世紀において中心火をめぐる毎日の運動の代りに地軸を中心とする地球の毎日の自轉を置き、それによつて對地球と中心火との假定を除き、サモスのアリストタルコスがさらに歩武を進めて、紀元前三世紀に地球が太陽を軌道の中心として回轉するといふ太陽中心假説に到達したのも、その起源をピュタゴラスにもつのである。我々はこゝにも假現的なものに安住せず、つねに現象の根源にある實相的なものに迫らうとしたギリシヤ人のロゴスを求める精神を見出すことができるであらう。

七 エジプト數學の實用的性格 同じ事態は數學においても見出される。アリストテレスの弟子エウデモスは彼の「幾何學史」を——現在傳承されてゐる一つの斷簡において——次のやうに首めてゐる。

「ところでひとは現代の觀點から技術や學問の起源をも考察しなくてはならぬから、我々は次のやうに述べておかう。幾何學は最初エジプト人によつて發明されたと多くの人々によつて語り傳へられてゐる、しかもそれは土地の測量から生じたものであつた。といふのはナイル河の氾濫によつて各人に劃定されてゐる境界が消失するために、この土地測量はエジプト人には缺くべからざるものであつたからである。そして他の諸々の學問と同じく幾何學の發明が必要から起つたといふことは少しも不思議ではない、凡てものは生成にあつては不完全なものから完全なものにむかつて進むものだからである。すなはち變化（進歩）は感覺から計量（的知識）に、このものから理性（的知識）に進むものだからである。かくてあたかも數の正確な知識が商業および契約上の必要からフェニキア人によつて始まつた如く、幾何學は敍上の理由からエジプト人によつて發明されたのである」(Proclus in Euclidem Commentar, ed. G. Friedlein. 1873 p. 64. Mülach; Fragmenta Philosophorum Graecorum. III p. 266.)。しかし幾何學の起源についてのかゝる見解を最初に定式づけたのは、周知の如く、ヘロドトスである。彼はナイル河の氾濫によつてしばしば混亂せしめられる耕地の境界を正確に測定するために、エジプトにおいて測地術 (γεωμετρία) すなはち幾何學が發明され、それがギリシヤに移入された、と語つてゐるからである。「歴史」第二卷、第一〇九章、アリストテレス「形而上學」第一卷、第一章、九八一 a 二三—二五。これらの證言からして我々はエジプトにおいて幾何學が、その名の示す如く、生活の便宜から來る測定の必要から生み出されたものであることについて疑ふ餘地はないであらう。

しかし我々は幸ひにしてこゝでも、エジプト數學の進歩の概況を明かにするために、ギリシヤ人の傳承以外に信憑すべきより原本的な資料をもつてゐる。それはロンドンの大英博物館所藏のリンダ・パピルス (Rhind Papyrus) に含まれてゐるいはゆるアームス (Ahmes) の數學教本である。この書は紀元前一七〇〇年から二〇〇〇年の間にアームスによつて書かれ、それはさらに古き時代の文書に據つて編纂されたものであることがその序文から推定されるからして、我々はエジプト數學の起源を求めて殆ど信ずべからざる過去に遡ることになるであらう。しかも一八七七年アイゼンロールによつてそれが解讀され、翻譯されて以來 (Eisenlohr: Ein mathematisches Handbuch der alten Aegypter 1877)、我々はこの奇蹟的な數學書に容易に近づきうるに至つた。それはエウクレイデス (エウクレッド) の「幾何學原本」(Γεωμετρικά, Elementa) に先立つこと實に一四〇〇年にも及び、人類に遺された最古の數學書であると言ふことができる。にもかゝらずそこには一元一次方程式を含む複雑な問題や、算術級數ないし幾何級數の應用とみらるべき問題の解法が與へられ、また二等邊三角形、矩形、梯形、圓、球などの面積を求めてほとゞ正確に近い結果が導かれてゐる。たとへば圓の面積は直徑からその長さの $\frac{1}{9}$ を減じた残りを平方することによつて見出されてゐる。従つて $\pi \approx \left(\frac{16}{9}\right)^2 = 3.16$ となり、實際の價 3.14 には極めて近い。しかし我々はこの教本の内容を仔細に茲に報告する必要はないであらう。(それにいつてはとくに M. Cantor: Vorlesungen über Geschichte der Mathematik. Bd. I. 1880 を参照されたい)。我々がとくにこゝに揚擧したく思ふのは、アームスの教本がその思考の豊富さと丹念さとおいて、西曆前三十世紀の昔に人類の奇蹟たるかの大ピラミッドを構築しえたエジプトの天才たちを想望せしむるものがあるにもかゝらず、そこに示されてゐるのは數學の原理や法則、ないしその證明ではなくて、たゞ敘上のことが

らに關する計算の實例であり、久しい歲月の間に蒐積された數學的經驗の忍耐強い記録に外ならぬといふことである。それはさきに引用されたエヂプト數學の實用的起源についてのヘロドトスやエウデモスの證言を裏切るものではなくして、却つてそれを裏づけるものである。そしてこの教本によつて代表されるエヂプト數學とタレスによるギリシャ數學の出發との間に十數世紀にわたる理解し難い空白時代を現出せざるをえなかつたのもかゝる性格に歸因するのみのは行き過ぎであらうか。

八 ギリシャ數學とエウクレイデスの「原本」 エウデモスの「幾何學史」はエヂプト人による幾何學の起源について語つた後に、さらに次のやうに續けてゐる。「タレスはエヂプトに赴いて、はじめてこの理論をヘラスに移入した、のみならず自分も多くのものを發見し、多くの原理を彼の後に來た人々に指示した、そして或る人々にはより抽象的に、或る人々にはより具象的に述べた」(Proclus, p. 65, Fr.)。もしさうであるならばタレスは天文學のみならず、幾何學をも異邦からギリシャに舶來した最初の人である。また同じ著者は、「直角は相等的い」、「二等邊三角形の底邊における兩角は相等的い」、「任意の直徑によつて圓は二等分される」、「一邊およびこれに接する二つの角がそれぞれ相等的い二つの三角形は合同である」などの諸定理をタレスに歸してゐる。さらにディオゲネス・ラエルティオスの傳へるところによれば、このミレトスの賢人は半圓に内接する凡ての角が直角であることを初めて發見して、神への感謝のために牡牛を犠牲に獻げたといふことである(第一卷、第二四章)。しかし周く知られてゐるこれらの傳承がどの程度に眞であるかを吟味し、タレスの斯學に對する寄與を枚舉することは我々の當面の任務ではない。こゝ

でも我々は天文學の場合と同じく、學の形成における具體的經驗から抽象的思惟への飛躍的な進化がタレスによつて齎されたことを、すなはちエゼプト人の幾何學的經驗と計數的直感とを素材とする嚴密學としての數學の形成が、この賢人においてはじめてその緒についたことを、さらに端的には測地術が幾何學になつたことを、認定しうれば充分なのである。

このことはギリシヤ數學の鼻祖としてタレスと並び稱せられるピュタゴラスにおいて決定的なものとなつた。再びエウデモスによれば「これらの人々(タレス、アメリストスおよびエリスのヒッピ阿斯)に次いでピュタゴラスは幾何學の諸原理を最初から(徹底して)考察し、諸定理を非質料的にそして理性的に検討して、幾何學に關する研究(*quæritatio*)を自由人の教養の形に轉じた、しかも彼は無理量(あるひは比例)の理説と宇宙的諸圖式の構成とを發見した」(Proclus, p. 65. Fr.)。我々はさきにピュタゴラスの世界像に若干觸れたが、著作を全く遺さなかつた彼自身の學說なるものは、ソクラテスの場合と同じく、傳説的な烟霧に包まれ、彼の學派のそれから判然とは識別し難い。彼の數學への寄與についても、すでにプロクロス以來、諸説紛々として未だ定説を與へられてゐない。たとへばさきにタレスに歸せられた三角形の合同の定理はむしろピュタゴラスのものであるとも言はれ、また三角形の内角の和が二直角であるといふ定理の發見もピュタゴラスに歸せられてゐる。いはゆる「ピュタゴラスの定理」は恐らく各邊が $a^2 + b^2 = c^2$ の比をもつ三角形は直角三角形であるといふエゼプトから來た知識と $\frac{a}{b} = \frac{c}{d}$ といふ算式とを結びつけることから歸結されたものであらう。この定理はエウデモスのいはゆる「無理量の理説」の基礎をなしてゐる。なぜならば二等邊直角三角形において、等邊の長さを一とすれば斜邊の長さは如何なる整数ないし分數を以てしてもたとへば近似的に

しか表示しえないからである。そしてもしプラトンが「テアイテトス」(一四七D)において證言してゐるやうに、 $\sqrt{3}$, $\sqrt{5}$, …… $\sqrt{17}$ をテオドロス——アナクサゴラス(五〇〇—四二八年)とほぼ同時代の人——の發見と看做し、 $\sqrt{2}$ はすでに彼以前に知られてゐたとするならば、これをピュタゴラスに歸することは充分理由のあることであらう。エウデモスのいはゆる「宇宙的諸圖形」とは「五つのプラトンの立體」と呼ばれるところの正多面體、すなはち正四面體、正六面體、正八面體、正十二面體、正二十面體のことである。しかしこれらの論議については數學史の研究(2)に Sir Thomas Heath; A History of Greek Mathematics. Vol. I 1921. Eva Sachs; Die fünf platonischen Körper, Zur Geschichte der Mathematik und der Elementlehre Platons und der Pythagoreer. 1917 などを参照)に譲つてここでは立ち入らないでおかう。我々はアリストクセノスが言つたやうに、「ピュタゴラスは數に關する理説を何ものにもまして尊重し、そしてそれを商人たちの實用から引き離し、凡ての事物を數になぞらへることによつて、それを進歩せしめたいと思はれる」(Diels-Kranz; Die Fragmente der Vorsokratiker⁵ Bd. I. 1934. 58 Pythagoreische Schule. B2) ことをよく確認しうれば充分なのであるから。またディオクラテスの *vita contemplativa* (の禮讚に相應しく(拙著「哲學的人間の形成」第一部、第一章、四「觀想的な生活とピュタゴラス」参照)、彼におつて *geometria* は *philosophia* となり、*mathematica* は *metaphysica* となつたのである。

ギリシヤ數學はピュタゴラスの後、アナクサゴラス、キオスのオイノピデス、デモクリトス、エリスのヒッピアス、キオスのヒッポクラテス、テオドロス、テアイテトス、アルキユタス、プラトン、エウドクソスなどの秀れた哲學者および數學者によつて異常な進歩を遂げ、その成果は紀元前三〇〇年頃アレキサンドレイアのエウクレイデスによつ

て「幾何學原本」に集大成されるに至つた。エヂプトに生れた測地術はギリシヤにおいて成長した後、再び故郷に歸つたとも言ひうるであらうか。プロク羅斯はエウデモスの「幾何學史」に續けて書いてゐる。「これらの人々(コロポオンのヘルモティモスおよびメドウマのプリッポス)より餘り若くない人にエウクレイデスがある。彼はエウドクソスによる多くのものを總括し、テアイトスによる多くのものを完成し、また彼以前の人々によつてより不精確に證明されたものを論議の餘地なき嚴密な論證に齎し、原本を集成したのである。この人はプロトレマイオス一世の時代に生きてゐた。といふのはプロトレマイオス一世の直後に出たアルキメデスがエウクレイデスについて記してゐるからである。そしてさらにプロトレマイオスが或るとき彼に『幾何學について原本よりもなほ手近な方法はないか』と訊ねたと言はれてゐるが、彼は『幾何學に王道はない』と答へた」(Proclus, p. 68 Fr.)。エウクレイデスの「原本」については今日種々の批判を加へその缺點を指摘することは容易であらう。しかしそれが數學史上にもつ世界支配的意義はこの學が殆ど理想に近い論理的正確さと形式的完全さを剋ちえたことにある。ギリシヤにおいて一般に學問を意味したところの *mathēta* が後に *Mathematik* の意味に限定せらるゝに至つたことも決して偶然ではなかつたであらう。

九 結語 哲學は根據への問ひから生れる 以上の論議の後に、我々はギリシヤにおける哲學の誕生について語る

ことができる。我々はさきに哲學的精神の母胎として閑暇と驚異とを擧げた。これらは確かに學の形成を動機づけるための必要な條件ではあるけれども、哲學の成立を可能にするための充分な條件とは稱し難い。ミレトスをしてヨロッパ哲學の發祥地たらしめたより根源的なそして本質的な原因は、古い傳統や因習を蟬脱して、人間の尊嚴さに相

應しい生活を創造しようとする自由の精神と、そして實利や效用を超越して眞理を眞理そのものために追求しようとする愛知の精神とであつた。多分に占星術的なパピュロニアの天文学を科學的な世界圖式にまで高め、實用的なエジプトの測地術を純粹に嚴密學的な幾何學にまで大成しえたのもまさしくこの愛知的精神なのである。その限りにおいて Ex oriente lux, ex occidente lux といふ人口に膾炙した言葉は新なる意味をもちうるであらう。それは理性への信頼と眞理への勇氣とを楯として、プラトンがつねに好んで語つたやうに、なにもものにもましてロゴスに従ひそれが導くまゝに進まふとする合理主義の精神とも言ふことができる。ギリシヤ的に表現すれば *Noyon Sabouai* への精神である。この言葉は文獻學的には種々の意味を擔ひうるであらうが、我々はその核心を根據への問ひにむかふものであると規定しようと思ふ。これこそ哲學の誕生の充分な條件なのである。

ところで根據への問ひとは何であらうか。それは第一に問はれたものについて一般者を索めることである。一般者とは、アリストテレスが「分析論」において詳論してゐるやうに、その語源に従つて——*kaθolou=kat' olou*——全體者であり、普遍的なるものであると同時に、ものそのものを固有の姿において顯はにするところの本質的なるものでなければならぬ。ひとは普遍性と本質性との統一としての一般者を明かにすることによつてのみ問はれたものに合理性を與へるのである。こゝに學の嚴密性が成り立つ。しかし根據への問ひは第二にかゝる合理性を與へうる場そのものをもさらに問はねばならぬ。最も究竟的なる問ひは問はれるものではなく、却つて問ふものに、さらには問ふものにおける問ひそのものの可能にむかはねばならぬからである。こゝに學の根源性が成り立つ。一は原理からの、他は原理への問ひである。 *Noyon Sabouai* はまさしくかゝる構造をもち、それによつてギリシヤ人は哲學の不滅の

教師となりえたのである。しかし我々は愛知的精神の本質としてのかゝる「問ひの構造」をさらに問ふことを斷念しよう。そしてエウリピデスの美しい章句をこゝに再び繰返へすに止めよう。

根源への探究を學びえたるものは、

市井の煩ひを求めず、

不正なる所業に淫せず、

ひたむきに不死なる自然の

不老の秩序を觀えたるものは、

何處より、如何にして、はた何故に

生じたるかを觀えたるものは、

幸ひなるかな。

(Tragicorum Graecorum Fragmenta, ed. A. Nauck: 910)

追記

筆者は蕪雜なこの一文を草するにあたり、古代哲學史、古代文化史の外、能ふ限りの自然科学史、數學史、天文學史などを參看したが、この國の現狀にあつて、この種の文獻を涉臘することの如何に困難であるかを、今更のやうに痛感せざるを得なかつた。筆者の直接利用しえた文獻の主なもの、次の通りである。なほ煩を避けるために、これらによる學證は凡て省略した。紙幅の制約上最後のかかなりの部分を簡約したことについて讀者の寛宥をえたい。

G. J. Allman; Greek Geometry from Thales to Euclid. 1889.

G. Billeter; Die Anschauungen vom Wesen des Griechentums. 1911.

S. H. Butcher; Some Aspects of the Greek Genius. 1904. (田中^一和^次壽岳共譯「ギリシヤ精神の様相」昭和十五年)。

S. H. Butcher; Harvard Lectures on the Originality of Greece. 1920. (兩角譯「ギリシヤ文化の特質」昭和十五年)。

F. Cajori; A History of Mathematics. Vol. I. 1919. (一尾譯「數學史講義」上卷、大正七年)。

M. Cantor; Vorlesungen über Geschichte der Mathematik. 4. Bd. I. 1922.

W. C. Dampier; A History of Science. 4. 1948.

F. Dannemann; Die Naturwissenschaften in ihrer Entwicklung und ihrem Zusammenhange. Bd. I. 1920. (安田^一加藤共譯「大自然科學史」第一卷、昭和一六年)。

F. Dannemann; Vom Wesen der naturwissenschaftlichen Probleme. 1928.

H. Diels; Antike Technik. 3. 1924. (本田譯「古代技術」昭和十五年)。

K. F. Ginzel; Die astronomischen Kenntnisse der Babylonier. (Klio. Bd. I. 1902)

H. Hankel; Zur Geschichte der Mathematik in Altertum und Mittelalter. 1874.

T. Heath; A History of Greek Mathematics. Vol. I. 1921.

J. L. Heiberg; Naturwissenschaft, Mathematik und Medizin im klassischen Altertum? 1920. (平田謙「古代科學」原典一冊半)。

J. L. Heiberg; Geschichte der Mathematik (J. v. Müllers Handbuch d. klass. Altertumswissenschaft. Bd. V, 1. 1925)

J. L. Heiberg; Exakte Wissenschaften und Medizin. (Einleitung in die Altertumswiss.? Bd. II 1912)

F. X. Kugler; Sternkunde und Sterndienst in Babel. 1907.

W. Libby; An Introduction to the History of Science. 1918.

M. Pohlenz; Der Geist der griechischen Wissenschaft. 1923.

G. Sarton; Introduction to the History of Science. Vol. I. 1927.

G. Sarton; The History of Science and the New Humanism. 1937. (森島謙「科學史の新ゴローマニスム」昭和十三年)。

W. T. Sedgwick and H. W. Tyler; A Short History of Science. 1927. (十屋山本共譯「自然科學史」昭和十年)。

D. E. Smith; A History of Mathematics. Vol. I. 1923.

P. Tannery; Pour l'histoire de la science hellène. 1887.

R. Wolf; Die Geschichte der Astronomie. 1877.

Oxford Classical Dictionary. 1950.

Pauly-Wissowa-Kroll; Realencyclopädie der klassischen Altertumswissenschaft. 1894 ff.